

枕草子に見えた仲忠・涼に関する文の解釈について

前 田 正 民

枕草子に宇津保物語に関するこの見えているのは次の各段である。

（文段及び本文は岩波書店の日本古典文学大系本による。）

○（前略）暮れぬればまゐりぬ。御前に人々いとおほく、上人などさぶらひて、物語のよきあしき、にくき所などをぞ定め、いひぞしる。涼・仲忠などがこと、御前にも、おとりまさりたるほどなど仰せられける。「まづ、これはいかに。とくことわれ。仲忠が童生ひのあやしさを、せちに仰せらるるぞ」などいへば、「なにかは。琴なども、天人の下るばかり弾き出で、いとわるき人なり。帝の御むすめやは得たる」といへば、仲忠が方人ども、所を得て、「さればよ」などいふに、「このことどもよりは、昼、齊信がまゐりたりつるを見ましかば、いかにめで惑はましとこそおぼえつれ」と仰せらるるに、さて、「まことに、つねよりもあらまほしくこそ」などいふ。（後略）（八三段）

○さて、その左衛門の陣などにいきてのち、里に出でてしばしあるほどに、「とくまゐりぬ」など、仰せごとの端に、「左衛門の陣へいきしうしろなん、つねに思しめし出でらるる。いかで、さつれなくうち古りてありしならん。いみじうめでたからんところ思ひたりしか」など仰せられたる、御返りに、かしこまりのよし申して、私には、「いかでかはめ

でたしと思ひ侍らざらん。御前にも、「なかなかをとめ」とは御覧おはしましけんとなむ思ひ給へし」ときこえさせたれば、たちかへり、「いみじく思へるなる仲忠がおもてぶせなる事は、いかで啓したるぞ。ただ今宵のうちに、よろづのことを捨ててまぬれ。さらずは、いみじうにくませ給はん」となん仰せごとあれば、「よろしからんにでにゆゆし。まいて「いみじ」とある文字に、命も身も、さながら捨ててなん」とて参りにき。（八六段）

○物語は 住吉。うつば。殿うつり、国ゆづりはにくし。埋れ木。月待つ女。梅壺の大将。道心すすむる。松が枝。こま野の物語は、古蝙蝠さがし出でて持ていきしがをかしきなり。ものうらやみの中将、宰相に子生ませ、かたみの衣など乞ひたるぞにくき。交野の少将。（二一二段）
○賀茂へまゐる道に、田植うとて、女のあたらしき折敷のやうなるものを笠に着て、いとおほう立ちて歌をうたふ、折れ伏すやうに、また、なにごとするとも見えでうしろざまにゆく、いかなるにかあらむ。をかしと見ゆるほどに、ほととぎすをいとなめうたふ、聞くにぞ心憂き。「ほととぎす、おれ、かやつよ。おれ鳴きてこそ、我は田植うれ」とうたふを聞くも、いかなる人か、「いたくな鳴きそ」とはいひけん。仲忠

が童生ひいひおとす人と、ほととぎす鶯におとるといふ人こそ、いとつらうにくけれ。(二二六段)

右記の中で、初の八三段の解釈が注釈書によってまちまちですっきりしない。そこで十年程前大阪の女子大文学に私見を載せるつもりで書きはじめ、途中で止してそのままにしておいたのであったが、たまたま昨年三月、桜楓社の「読書」に、北条忠雄氏が「枕草子のアイロニカルな表現」の題名で同じ問題を取り上げておられたので、以前の拙稿に加筆して、各位の御批正を請うことにした。

問題の第一は、「仲忠が童生ひのあやしき」の「あやしき」であるが、手許に有る新旧の注釈を羅列すれば次の通りである。

加藤盤斎の抄は本文が他と違って、(前略)「なかなたゞがわらは、老のあやしきを、せちに仰らるゝぞ。など、いへば、何かは。琴なども、天人下るばかりひきて、いとわかき人なり」(後略)とあって、注に、「何かは以下」は、女房達の詞なり。なかなた老のあやしさをいふにあらず。琴などもよくひきし人ぞとなり。「いとわかき」とは、老のあやしきにはあらず、やさしき人ぞとなり。(国文学註釈叢書本二七五頁)

北村季吟の春曙抄には、

「仲忠はわらはの生立より奇特有し物ぞと、深切に后宫にも被仰ぞやと清少にいふ也。仲忠に最眞の人々の詞也」とある。(国文学註釈叢書本枉園抄二四八頁)

岡西惟中の旁註には、

よくあやしき也(国文学註釈叢書本一三九頁)

武藤元信氏の枕草紙通釈は春曙抄の註を載せている。(通釈上二七四

頁)

金子元臣氏の評釈(三八六頁)

幼立の卑しげなるを切に宮は仰せらるるぞと也。中宮は涼最負になりて、仲忠をいひおとし給ふ也。「わらはおひ」は童生なり。「あやし」は卑しの意なるを、諸註、奇特の意に誤解したる為、文意徹底せずなれり。

吉村重徳氏の新訳註解枕の草子(一七九頁)

仲忠が幼少の時代から奇特であった事を、御前にも切に仰せられますわ。

栗原武一郎氏の全釈(三六二頁)

「童おひのあやしき」の注に、「仲忠の幼時、その母は零落の極に達してゐた。仲忠は僅か四歳か五歳の時分から魚を釣ったり木の実を拾ったりして母を養つてゐた。その孝心に感じて仙童が現はれて木の実を拾ふ手伝をする。大きな熊はその棲家としてゐた杉の空洞(ウツボ)を仲忠母子に譲る。仲忠はそのうつぼで、山のけだものどもに養はれて成人したのである。(俊蔭の巻)」とし、口訳には「生立の怪しき」としてある。即ち栗原氏は「奇特」というよりも「奇怪」とされたようである。

永井一孝氏の新釈(一七七頁)

仲忠の幼少の時から奇特な事のあつたのを中宮も切におつしやるぞ。

田中重太郎氏の日本古典全書本の頭注(一四四頁)

宮様は幼年時代の賤しいことをよくないと、とても御主張なさいますが。

岩波書店の日本古典文学大系本の頭注(一二二頁)

宮様は仲忠の生い立ちの賤しさを強調なさるのですよ。仲忠は幼時山中の木の間洞に住み、母（俊蔭の女）を養った。宇津保、俊蔭の巻に見える。

北条忠雄氏

中宮様は仲忠の生い立ちの賤しさを

大体以上の通りである。

第二は、「なにかは」以下の問題である。まず諸註釈を掲げる。

抄

「何かは以下」は、女房達の詞なり。

とあり。そのあとは前記の通りで、更に、

「御門の御むすめやは得たる」とは、たはぶれていふ義なり。（二七六頁）

天人をるるばかり琴引たる事、うつばの俊景の巻におほく見へたり。うつば物語七云、又、殿も仲忠をころし給はゞや、見給はずばこそあらましか。それも、琴一声かい引て聞せ奉らましかば、にくみもはて給はゞらまし。さりし時だに、あやまたず成にしものを、いとよくさりぬべき折も有しかば、御門の御むすめも給はらずや有ける。同十卷三云、心とどめて、琴つかうまつりしに、仲忠の朝臣に一の内親王、すずしの朝臣に、まさよしが九にあたる女給ふべき由、せんじ下りにし云々。（二七七頁）

春曙抄（枉園抄による）

「何かは」清少の詞何かはよからんと也。

「いとわろき人也」あまりの事に云ことば也。

「ななたゞがかた人と心をえて」人々の心也。

この標注には、「ななたゞがかたうど思て」と拔書し、「いとわろき人とはいへど、琴をひきし事などいふは、下心は清少も仲忠が方人と人々思ひて、さればよと云也。実は清少は頭中将をはむる下心ありて、仲忠をわろき人といひしなるべし」（二四七・二四八頁）と記してある。

枉園抄には岩崎美隆は、「仲忠がことをわざとあしくいへる詞おもしろし」（二四九頁）

旁註（一三九頁）

「なにかは。きんなども、天人おるばかりに引て、いとわかき人也。みかどの御むすめやはえたる」の「なにかは」の傍に、「清少詞」。「いとわかき人也」の傍に「何も、みなはめたる也」「みかどの御むすめやはえたる」の傍に「たはぶれて也」とある。

武藤氏通釈（上巻二七二頁・二七四頁）

「何かは」に頭注して（あやしからん）と補つてある。

「天人のおるばかり」空穂吹上上に「こゝは神泉、かむたちめ、みこだちつきなみたまへり。たんゐんたまはる。藤えい舟にのりて、はなたれたり。ななたゞきんたまはりてひく。雪ふれり。天人おりきてまふ。

「いとわろき人」特更に反対にいへるなり。源氏帚木に「庭の紅葉こそげにふみわたるあともなけれ」とあるも、あとありといふべきを、わざとかくいへるなり。八十三段の草の庵の答とよく似たり。されどそれは人の詞にすがりて反対にいふなり。是はしからず。

「御門の御むすめ云々」空穂吹上上に「すずしにはあてこそ、ななたゞには、そこに一の内親王ものせらるゝを、それをたまふとおはせらる」

とあるを取出でたるなり。さて此やほも反語にあらず。

「所をえて」少納言が仲忠を啓めたるがため、仲忠最負の人々、得意になりたるをいふ。

金子氏評釈（三八六頁・三八七頁）

「何かは琴なども云々」何として、涼はいふに足らん、琴なども天人の降るグラキのことを弾きて、甚だ劣等の人なり、そのうへ、帝の御女を賜り得たるか、否それも得はせぬと也。こは仲忠が琴の音に、天人降下以上の奇特を現して、女一の宮を得たるを下に思ひて、仲忠を揚げて、涼を抑へたる也。「ばかり」は俗言の、グラキに当る。この解、旧註は勿論、新註も、天人おるばかりを仲忠の事として、わざと反対にわるくいへる也など解けるは、甚だ誤れり。これは涼の事なるをや。

「天人おるばかり」空穂物語吹上の巻に、神泉苑の紅葉賀に、涼、仲忠が、琴仕うまつることをいひて「涼、仲忠が琴の音ひとし。仲忠、同じくは天地驚くばかり仕うまつらんと思ひぬ。―仕うまつるに、雲の上より開き、地の下よりとよみ、風雲動きて、月星騒ぐ。屏風のやうなる火ふり、雷鳴りひらめく。雪、貪の如凝りてふる。―涼仕うまつるに、仙人くだりて舞ふ」。

「いとわろき人なり」甚だ劣りたる人なりと也。「御門の御女やは云々」空穂、吹上に「涼にはあてこそ、仲忠にはそこに一の内親王物せらるゝを、それを賜ふと仰せらる」とあるを取出でたり。

「仲忠がかたうどと心を得て、」仲忠最負の人々が、清少を仲忠の方人と合点してと也。「かたうど」は方人の音便にて、身方なり。「心を得て」は、清少が涼をいひ落したるを見て、仲忠方なりと合点する也。

この口訳は次の通り。

「涼などは、何でもありません。琴など弾いても、天人のおりる位のけちな奇特を現して、甚だつまらぬ人であります。仲忠のやうに、御門のお娘を得たか、得は致しません」といふと、仲忠最負は、私を仲忠の身方だと合点して、それだから、さいはない事でありません」などいふに云々。（最負を最負としてあるのは原文のまま。）

吉村氏（一八〇頁）

「いとわろき人なり」甚だよくない人である。「みかどの御むすめ云々」これも吹上上に「すずしにはあてこそ、仲忠にはそこに一の内親王ものせらるるをそれをたまふとおほせらる」とあるのをいつたので、得た事は分つてゐるから、殊更得ないようにいつて意味を強くしたのである。

吉村氏はこのところの口訳を次のように記されて居る。

「何としても琴なども天人の天降る程弾いて、甚だ悪い人です。御門の御娘をばいただきませんねえ」といひますと、仲忠最負の人達は得意になつて、「それ御覧なさい」などいひます。

栗原氏全釈（三六二頁・三六三頁）

「天人のおるばかり云々」神泉苑の紅葉の賀の折、陛下の御前で、仲忠と涼と互に秘曲を競つた。仲忠の琴の音につれて、天地は震動し、風雲頻りに去来して、月星大いに騒ぐ、小石のやうな雹は降り、雷は鳴り、電は閃く。涼の琴の音につれて、天人天降つて一さし舞ふ。（吹上の巻下）

「みかどの御むすめ云々」みかどは御感のあまり、仲忠には第一の内親

王を賜ひ、涼には絶世の美人あて宮を賜ふと仰せ出される。(吹上の巻下) みかどのお言葉のとはり仲忠は第一内親王を娶つた。しかしあて宮は涼のものとならなかつた。あて宮は東宮妃殿下となつたのである。涼はあて宮の妹を妻とした。(田鶴の村鳥の巻)
このところの口訳は次の通り。

なんの涼などが仲忠と較べものになりませう。あの男は琴なども天人の天降るぐらゐに弾ける程度のもので、至つて感心できない人物です。仲忠は立派にみかどのむすめを手に入れたが、涼はどうか、果して手に入れることが出来たか、出来はしなかつたでせう」と云ふと、仲忠覚の女房たちは得意になつて、「それ御覧なさい」などと言つてゐる時に云々。

永井氏新釈(一七七頁・一七八頁)

「何かは」いかさまマア奇特である。「か」「は」は共に詠歎の助詞。(原文詠歌と誤植されている。」「わらはおひのあやしさ」といつたのを承けて、まづ首肯する意をあらはしたのだ。

「きんなども天人の云々」宇津保、吹上ノ上に「こゝは神泉、上達部親王だつきなみたまへり。探韻たまはる。藤英舟にのりて、放たれたる。仲忠さんたまはりてひく。雪ふれり。天人おりきて舞ふ」とあるをさしていふ。

「いとわろき人なり」甚だよくない人である。わるいほどに奇特な人といふ意。

「みかどの御むすめ云々」これも吹上ノ上に「すずしにはあてこそ、仲忠には、そこに一の内親王ものせらるゝをそれをたまふとおほせらる」

とあるをいふので、得た事は分つてゐるから、殊更反対に得ないといふやうにいつて、意味を強くあらはしたのだ。「や」は反語の助詞。

「所をえて」得意になつて。

「さればよ」それこそ少納言もあのとほり仲忠の味方であるよ。

口訳次の通り。

「いかさまマア、琴などをも天人の天降る程に弾いて、甚だわるい人です。御門の御娘をばいただきますね」といふと、仲忠の最眞の人たちは得意になつて、「それこそ御覧なさい」などいふに云々。

国民図書株式会社の日本文学大系本(五二二頁)

「何かは」仲忠を悪しく言ふは、涼を良く言ふ方なり。故に涼とて、何かは良からむと言ひしなり。仲忠には一の内親王を賜へる事は、宇津保吹上に見えたり。

「天人おるばかり」涼、琴弾きし時天人降り、仲忠の時には天変地異ありしなり。

田中氏は日本古典全書本(一四四頁)

「なにか。琴なども天人の」「どうして仲忠は涼に劣るのですか。涼は琴なども天人が下りるほど巧みに弾きましたが、それだけであつて、まことにつまらない人です。仲忠のやうに帝の御むすめをたまはつたでせうか。」宇津保物語吹上の下神泉苑の紅葉の賀には「かかるほどに、涼仲忠の琴の音ひとし。……(仲忠)たまはりてなに心なくかき鳴らすに、天地ゆすりて響く。……仲忠七人のしらべたる大曲のこさずひく。涼いやゆきが太曲の音の出づるかぎりつかうまつる。夫人くだりて舞ふ。……(主上)『いはゆるあてこそ。それこそよき今宵の祿なれ。涼にはあ

てこそ、仲忠にはそこに一の内親王ものせらるるを、それをたまふ」——
日本古典文学大系（一二二頁）

「なにかは」どういたしまして。作者の詞。

「琴なども天人の下るばかり云々」涼はさんの琴（七絃）なども天人が聞き惚れて天降る程には弾きましたが、至ってつまらぬ人です。神泉苑の紅葉の賀の折のことをさす。

「帝の御むすめやは得たる」仲忠のように皇女をいただきましたか。仲忠は紅葉の賀に琴を弾じ女一の宮を賜わった。

「仲忠が方人ども、所を得て」仲忠びいきの人々は得意になって。「方人」（かたうど）は味方の意。「さればよ」それごらんない。

北条忠雄氏のは特にこの段について論ぜられていて頗る明快、私の従来抱いていた点が可なりつくされてるので、その大部分を摘出させて頂く。

一、「アイロニーがアイロニーとして理解されるには、その使用場面が的確に分かっていることと、その表現内容の背後にひそむ事実が正確につかまれていることが必要である。若しこの二つの点が理解側に不足しているならば、アイロニーは必ずしもアイロニーとしては理解されず、せつかくの技巧もその効果を期待し得ないのみならず、時には全く曲解されたり誤解されたりしてしまうであらう」

二、「涼ビイキの中宮は仲忠の童生いの賤しさを痛烈にこきおとす、仲忠ビイキの女房達はこの論鋒には施す術なく困じ果てている、そこへ登場したのが仲忠覚の第一人者清少納言だったのである」

三、かくして、満場——仲忠方も、清少の弁解如何と、期待しつつ警戒し

つつ固唾を呑み耳をそばだてたのである。正に息づまる場面というも誇張ではなからう。

その時、清女の口をついて出た言葉が右の一節なのである。そのまま口訳しよう。

何の、（仲忠など）琴なども天人が舞い下りる程弾き出したり、ほんとにつまらぬ人ですわ。それに主上様の御娘を手に入れたでしうか。

何というすばらしい逆語表現であろう。たしかにこれは並みいる人々の——分けても涼方にとっては——意表に出た言葉であつた。仲忠のいかなるすぐれた点をあげて弁解にこれつとめるかという期待と警戒とを全く外らして、ズバリと逆語表現でこれを否定し去つたのである。しかし、その表現の背後にひそむ事実によつて、逆語は反転してかえつて仲忠を礼讃し賞揚したことになるのである。表面は仲忠をつまらぬといっているのであるから、相手たる涼方にとっては全く反駁の余地はない。涼方の女房達がハタと沈黙し、さしもの聡明な中宮をして「このこともより……」と苦笑とともに場面の転換を余儀ならしめたのもまた当然といわねばなるまい。「このこともよりは」の中宮の一言に、中宮の苦笑（涼方の惨敗）と清女の得意とを言外に読みとらなければ真の理解とはいひ難いであらう。更に「ところを得て」と「さればよ」とに仲忠方の女房達のホツとした安堵感を見るべく、又「と」「こ」は仮名の相似でいづれが原形とも断じ難いが「こころ」とれば、アイロニーの意味が分かつての意とならう。

四、「従来の註釈が一つとしてこれをアイロニーとして理解しなかつた

のはむしろ不審に堪えない。私のアイロニーとしての理解は、もともと表現面を仔細に辿っていつての自然の解釈であつて、決して事実を踏まえてのものが先行したのではなかつた。若しこうした逆語としての理解が正しいとすれば、そこから推測される事実は次の二つである。

(1) 天人の舞い降りたのは仲忠の琴である、又註釈家が涼の歌とした、そのときの「あさばらけほのかに見ればあかぬかな、をとめのすがたしよしとめなむ」の歌も仲忠のものとなる。

(2) 帝の御娘を得たのは仲忠である。

(2)は従来の解釈もそうであり宇津保自身もそうであるから問題はないが、ただ従来の註釈は(2)の「みかどの御娘やは得たる」の主格を涼とするが、私は逆語とするから仲忠となる。(1)は従来の註釈はすべて涼としている。ここに問題は、(1)を涼とするのが正しいか、仲忠とするのが正しいかとなり、これを決するのは宇津保物語である。私は宇津保をよんでその文面から仲忠とするのがむしろ自然であると考えると同時に、このとき仲忠の弾いた琴が、『この二つの琴（「はし風」「なん風」）の音のする所は下界でも必ず舞い降りる』と天人が誓つた「はし風」であつたことからそうした読みとりが正しいと信じている。

以上が北条氏の所論である。

ここで私の卑見を述べる前に、この段に連関する宇津保物語の原文を摘記することにする。本文は日本文学大系本による。

(4) かくて三十の琴を造りて、俊蔭、此の林より西に当れる梅檀の林にうつろひて、此の琴の音を試みむとて出で立つ程に、旋風いできて三十の琴を送る。そこにて音を試みるに、二十八は同じ声なり。半ばを二

に造れるは、山崩れ池割れ裂けて七山一つにゆすりあふ。(八頁) 天人の曰く、「さらば、我等が思ふ所ある人なれば住み給ふなりけり。天の掟ありて、天の下に琴ひきて族立つべき人になむありける。我は昔、いささかなる犯ありて、ここより西、私の御国よりは東なる所に降りて、年ありて、そこに我が子七人とまりにき。その人は、極楽浄土の樂に琴を弾き合はせて遊ぶ人なり。そこに渡りて、その人の手を弾き取りて日本国へは帰り給へ。この三十の琴の中に声まさりたるをば我名づく。一つをばなん風とつく。一つをばはし風とつく。この二つの琴をば、かの山の人の前にてばかりに調べて、また人に聞かすな」と宣ふ。「此の二つの琴の音せん所には、娑婆世界なりとも、必ずとぶらはむ」と宣ふ。

(九頁)

かくて六月六日に、子生まるべくなりぬ。気色ばみて悩めば、軀肝心を惑はして、「平らかに」と申し惑ふ程に、殊に悩む事もなくて、玉光り輝く男子を生みつ。(二八・二九頁) かかる程に、此の母君、忙しき事いやす／＼に覚えて、子の親にさへなりて、思ひ焦る／＼に、此の子養ひもてゆくままだに、玉光り輝き下見ゆれば、あはれ祖父坐せましかば、如何にいつきかしづき養ひ給はましと思ふも悲し。(二九頁) かかる程に、此の子五つになる年の秋つ方、軀死ぬ。此の親子、聊か物食ふこともなくなりぬ。(三一頁) 此の子言ふ、「誠に我孝の子ならば、氷解けて魚出で来。孝の子ならずば、な出で来を。」とて泣く。時に、氷解けて大いなる魚出で来りて、往きて母に言ふ様、「我は誠の孝の子なりけり」と語る。小さき子の、深き雪を分けて、足手は蝦の様に、走り来るを見るに、いと悲しくて涙を流して、「などかく寒さに出でて歩く

ぞ。斯からざらむ折、出でて歩け』と泣けば、「苦しうもあらず、御許を思へば」とて、止まるべくもあらず。ありつる魚は魚と見つれど、百味を供へたる飲食になりぬ。怪しう妙なる事多かり。

かかる程に年返りぬ。此の子まして大きに、敏く賢し。変化のものなれば、たゞ大人の様になりて、人に見ゆれば、「誰が子ぞ。親は誰とかいふ。此のわたりにあるべし」など言ひて求むれば、自ら尋ねも来ぬべし。かく歩いて人にも見え知られじ、此の河原にのみやは魚は有ると思ひて、下りて其の河より渡りて、北様にさして往きて、山に入りて見れば、大いなる童上を掘りて、物を取り出でて、火を焚きて焼き集めて、又大いなる木の下に往きて、椎、櫟、栗などを取りて、此の子を、「何しに此の山にはあるぞ」と問へば、「魚釣りに来つるぞ、おもとに食はせ奉らむとて」と言へば、「山には魚は無し。又生きたる物殺すは罪ぞ。これを拾ひて食へ」と教へて、此の掘り拾ひ集めたる物どもを取らせて、童は失せぬ。此の子嬉しと思ひて、持て往きて、母に食はす。此の後、山に入りて、見せ知らせし藁藪野老を掘りて、木の実かづらの根を掘りて養ふ。雪高う降る日、藁藪野老の有り所も木の実の有り所も見えぬ時に、此の子、「我が身不孝ならば、此の雪高く降りまされ」と言ふ時に、いみじう高く降る雪、忽ちに降り止みて、日いと麗かに照りて、ありし童出で来て、例の藁藪野老焼き調理して取らせて失せぬ。かく遙かなる程を、し歩くも苦しう覚えて、いかで此の山にさるべき所もがな、近くて養はむと思ひて、山深く入りて見れば、いみじう厳めしき杉の木の間、物を合はせたる様にて立てるが、大きな屋の程に開き合ひてあるを見て、此の子の思ふ様、こゝに我が親を据ゑ奉りて、拾ひ出

でむ木の実をも先づ参らせばやと思ひ寄りて見るに、厳めしき牝熊牡熊、子を産み連れて棲むうづばなりけり。（中略）牝熊牡熊荒き心を失ひて、涙を落して、親子の悲しさを知りて、二つの熊、子どもを引連れて、此の木のうづばを此の子に譲りて、他嶺にうつりぬ。（三二頁―三四頁）

斯くしつつ、此の琴弾くを聞く程に此の子七つになりぬ。彼の祖父が弾きし七人の師の手、さながら弾き取り果てつれば、（中略）琴は残る手なく習ひ取りつ。此の子変化の者なれば、琴の手母にも勝りて、母は父の手にも勝りて、物の次々は劣りこそすれ、此の族は、伝はることに勝ること限りなし。かくて此の子十二になりぬ。かたちの麗はしく美しげなる事更に此の世の物に似ず。綾錦を著て、玉の台にかしづかるる国王の女御、后、天人よりも、かかる草木の根を食物にして、岩木の皮を著物にし、獸を友にして木のうづばを住処として、生ひ出でたれど、目もあやなる光添ひてなむありける。母も、父君添ひていつきかしづきし時よりも容貌は勝りて、めでたきこと限りなし。此の年頃、ただ此の猿共に養はれて、こよなく便りを得たる心地するもあはれなり。水は、蓮の葉の大きなるに包みて持て来。藁藪、野老、果物は、様々なる物の葉に包みて持て来集まる。

かかる程に、東国より、都に敵ある人報いせむと思ひて、四、五百人の兵にて、人離れたる所を求むるに、此の山を見占めて、恐ろしげにかき者共、一山に満ちて、眼に見ゆる鳥獸、いろをも嫌はず殺し食へば、鳥獸だに山を離れて逃げ隠るるに、隠れ所もなき木のうづばに親子籠りて、草木をも食ふべき便りなく、天地をも眺め見るべくもあらず、

いみじき時に、年頃養ひつる猿、猶この人をあはれと思ひて、武士の寝しづまるをうかがひて、青葛を大いなる籠に組み、いかめしき栗、椽を入れて、蓮の葉に冷やかなる水を包みて来るに、木の下毎に臥せる武士共、猿の渡るとも知らず、木の葉の戦ひに驚きて、「ここに山のものの音す」とて、そこらの人、火をともして罵るにせむ方なし。母の思ふ様、我が親は、此の二つの琴をば、幸ひにも、禍にも、極めていみじからむ時、弾き鳴らせとこそ宣ひしか。我今より勝りていみじき目を何時か見む。さはいへど、斯くばかりにやはありつる、これこそ限りなめれと思ひて、此のなん風の琴を取り出でて一声弾き鳴らすに、父主の七人の人の調べてし声に聊かかはらず。一声かき鳴らすに、大きな山の木挙りて倒れ、山倒に崩る。立ち開めりし武士、崩るる山に埋れて、多くの人死ぬれば、山さながら静まりぬ。 (三六頁―三八頁) (以上「俊蔭」の巻)

(四) かくて院の帝紀伊国より帰らせ給ひて、内裏の帝神泉に紅葉の賀聞召すべき御消息きこえ給ふ。(中略) かくて御遊びはじまりて、上達部、惜しむ手なく仕うまつる。院の帝聞えさせ給ふ、「上達部惜しむ手なく仕うまつるに、涼、仲忠、徒らにさふらふまじき者なり」と宣はせて、「琴仕うまつらすべし」と聞え給ふ。(中略) 仲忠かしこまりて、仰せを承りて、涼と競ろひて、なほ声立てず。帝、「如何はせむ、涼、遅し」と仰せらる。苦しと思ひつつ、さきの調べにて一の琴をほのかにかき鳴らす。仲忠、辛うじて同じ事を僅かにかき合はせて、こかの手を仕うまつりぬ。夜深くなりゆくまゝに、琴のひびき高く出づ。人々ことに心とまりて、こかの手どもを仕うまつり尽す。帝よりはじめ奉りて、

そこらの人、涙おとし給ふ。

かかる程に、涼、仲忠の琴の音ひとし。右大将の主、もたせ給へるなむ風を、帝に、「これなむ、仲忠が見給へぬ琴に侍るなり。仕うまつらせむ」と奏し給ふ。賜はりて、「何心なくかき鳴らすに、天地ゆすりて響く。帝より始め奉りて大いに驚き給ふ。仲忠いまは限りこの琴まさに仕うまつり静まりなむや。ねたく口惜しきに、同じくは天地驚くばかり仕うまつらむと思ひぬ。涼、彌行が琴、なむ風に劣らぬあり、この琴を院の帝に参らせしを、帝同じこゑに調べて賜ふ。仲忠、かの七人の人のつたへし手、涼は彌行が手を少しねたう仕うまつるに、雲の上よりひびき、地の下よりとよみ、風雲動きて、月星さわぐ。礫のやうなる氷降り、雷鳴りひらめく。雪霰のごと凝りて、降るすなはち消えぬ。仲忠、七人の人のしらべたる大曲、残さず弾く。涼、彌行が大曲の音の出づる限り仕うまつる。天人くだりて舞ふ。仲忠、琴にあはせて弾く。

朝朗はのかに見れば飽かぬかな中なるをとめしばし留めなむかへりて今一返り舞ひて上りぬ。

帝御覧するに、量りなくすべき方思されず。すなはち、仲忠に正四位の位賜ひて左近中将になされぬ。涼に同じ位、同じ中将になされぬ。涼源氏なり、琴仕うまつらずともこの官位賜はるべし。その代りに、祖父種松に五位の位賜はりて、紀伊守になされぬ。帝、左大将に宣はす、「今宵涼、仲忠に賜ふべきもの国の中にはおぼえぬを、朝臣のみなむ賜ふべき」と仰せらる。大将、「あなかしこ。公にだにさふらはざらむものを、正頼はいかでか賜ふべからむ」帝御けしきよく打笑はせ給ひて、「そこには女子あまた持給へる。ことに有りがたくものせらるゝを、今

宵の祿に、涼、仲忠に賜はむなむ、勝すものなかるべき。」大将、「賜ひ侍りなむに、別いても涼、仲忠が今宵の祿に、あたるべき女子やあり難く侍らむ。」上、「いはゆるあてこそ。それこそは良き今宵の祿なれ。涼にはあてこそ、仲忠には、その一の内親王ものせらるゝを、それを賜ふ。」と仰せらる。涼、仲忠崩れ下りて舞蹈す。(二三頁―二三五頁)
(「吹上」下の巻)

以上引用文で大変な紙面を費すことになったが、卑見を述べるにどうしても必要であると思つた為である。清少時代で物語といえは、必ず宇津保物語に第一指を屈せられたらうことは、始めに引いた枕草子の各段を見ても明らかである。後世に比べてさほど種類も多くもない物語のことであり、宇津保については、宮中の男性女性是十分知悉していたに相違ない。現存の宇津保物語と清少達の見たものと、どれだけ差違があったかは分らぬが、筋などにそう大した違いはなかったものとしてよいかと思う。さて、聡明で勝気で朗らかな茶目氣に富み、ユーモアを解し、打てばびびくという風に中宮と清少との性格は相似た点が非常に多く、かつ中宮が清少を深く愛された様子は枕草子に躍如としており、同時に清少が中宮を尊崇したことは絶対的である。八六段に「よろしからんだにゆゆし。まいていみじとある文字に命も身も、さながら捨ててなん」といい、一〇一段に「御かたがた、君たち、上人など、御前に人のおほくさぶらへば、廂の柱によりかかりて、女房と物語などしてゐたるに、物を投げ賜はせたる、あけて見れば、一思ふべしや、いなや。人、第一ならずはいかに」と書かせ給へり。御前にて物語などするついでにも、「すべて、人に一に思はれずは、なににかはせん。ただいみじ

う、なかなかにくまれ、あしうせられてあらん。二三にては死ぬともあらじ。一にてをあらん」などいへば、「一乗の法なり」など、人々もわらふことのすぢなめり。筆・紙など賜はせられたれば、「九品蓮台の間には、下品といふとも」など、書きてまゐらせたれば、「むげに思ひ屈しにけり。いとわろし。いひとちめつることは、さてこそあらめ」とのたまはす。「それは、人にしたがひてこそ」と申せば、「それがわるきぞかし。第一の人に、また一に思はれんところ思はめ」と仰せらるるもをか。といつてゐること。また、有名な雪山の条八七段で「かう心に入れて思ひたることをたがへたれば、罪得らん。まことに、四日の夜、侍どもをやりてとり棄てしぞ。返りごとにいひあてたりしこそ、いとをかしかりしか。その女出で来て、いみじう手をすりていひけれども、「仰せごとにて。かの里より来たらん人に、かく聞かすな。さらば、屋うちこぼたん」などいひて、左近の司の南の築土などに、みな棄ててけり。「いと堅くて、おほくなんありつる」などぞいふなりしかば、げに廿日も待ちつけてまし。今年の初雪も降り添ひなましなどいふ。上もきこしめして、「いと思ひやりふかくあらがひたる」など、殿上人どもなどに仰せられけり。さても、その歌語れ。いまかくいひあらはしつれば、おなじごと勝ちたるなり」など、御前にも仰せられ、人々ものたまへど、「なでふにか、さばかり憂きことを聞きながら、啓し侍らん」など、まことにまめやかにうんじ、心憂がれば、上もわたらせ給ひて、「まことに、年頃は、おぼす人なめりと見しを、これにぞあやしと見し」など仰せらるるに、いとど憂く、つらく、うちも泣きぬべき心地ぞする。「いで、あはれ、いみじく憂き世ぞかし。のちに降り積みて侍り

し雪を、うれしく思ひ侍りに、「それはあいなし、かき棄てよ」と仰せごと侍りしか」と申せば、「勝たせじとおぼしけるななり」と上もわらはせ給ふ』などのところを見ても、あれほど執念をこめた雪を掻き捨てられてさえ、これくらいの恨み言を言っているに過ぎない。(尤も中宮の茶目氣を心得ているからでもあらう。)

当時の時世では、特に敵視するのなければ、(例えば、いかにも溫柔に見える紫式部が、その日記に清少をこつびどくきおろしたような。)目上の人に対して、その氣を悪くするようなことはしなかったであらう。まして絶対信奉の中宮が涼びいきである場合、二二六段にあるような、「仲忠が童生ひいひおとす人と、ほととぎす鶯におとるといふ人こそ、いとつらうにくけれ」など頗る角ばった書き方はしなかっただろうと思う。金子氏は、「反仲忠論者なら、中宮様だろうが御主人だろうが、用捨はない」と、軽く言い放つて居られるが、果してそうであらうか。女性の執念は恐ろしい。どんなに怜悧な中宮で清少を深寵されていても、何といつても侍女である清少のこんないい方を、快く思われるはずはあるまい。前に引いた宇津保(4)即ち俊蔭の巻に見えておる、仲忠の童生いのところには奇特な事跡が沢山見えている。「あやし」は元來、奇異なさまで、くすし、ふしぎなり、常に異なり、非常なり、きたいなりなどの意から、賤しいに變じて使うようになったらしく、中古時代にはすでに両様に用いられているが、この場合は、卑賤な生い立ちということよりも、奇特な事跡ということが非常に印象深い。これを「賤しい事」と断ぜられたのは金子氏である。私も金子氏の該博な知識には随分啓発され、敬服もしているが、可なり突飛な解釈も尠くない。

(評釈四十段の蓑虫の「ちちよ」を「乳よ」であるという見方なども私には首肯しがたい。)一体に古典の研究は大いに進歩していることは事実であるが、古註は古典に時代的に接近しており、時代観も無下に退けるべきでは無いと思うことが尠くない。「あやし」はどうも古註がよいと思われる。この点北条氏の見方には賛成しかねる。私は中宮も仲忠党であると断じたい。女房達が涼・仲忠両派に分れて論じあっている時、中宮は清少も仲忠党であることを見通して、仲忠の生い立ちの奇特さを強調されているところへ清少が出て来たのである。さて、普通の人なら、すぐ中宮と同様の言葉で相槌をうつべきところを、人々の意表をついて、天人の降るような奇蹟を表わした仲忠を、天人が降るだけぐらいのつまらぬ人とか、帝の御娘を得たのに、得なかったではないかとかと、二つの事柄に逆語を使って中宮に賛意を表したのである。二つも並列したので、優劣論に熱を挙げていた女房達も、すっかり毒氣をぬかれている。その時、間髪を入れず、中宮は、「このことどもよりは……」と、齊信の服裝の方へ話を転じて、小競合の場面に終止符をうたれたので、中宮の叡智が描かれているようである。

ところで、宇津保の原文の「かかる程に、涼、仲忠の琴の音ひとし」。以下の文意のとり方の誤から、金子氏や栗原氏のような考が生じて来る。金子氏等は、宇津保に「涼、彌行が大曲の音の出づる限り仕うまつる。天人くだりて舞ふ」とあるのによつて、涼の琴の音で、天人が降つたと見られたからで、この文句だけでは、如何にもそうなるが、それは近視眼的な見方である。

ここでの二人の奇蹟については、まず「涼、仲忠の音ひとし」とあ

るのに留意すべきで、二人の技倆は伯仲して甲乙がないのである。仲忠の琴はなん風であり、涼の賜わった彌行の琴はなん風に劣らぬものである。仲忠がなん風を賜わって何心なくかき鳴らすと、天地ゆすつて響いた。帝を始め大いに驚かれる。仲忠もはや弾きやめることが出来ない。同じくは天地驚くばかりに弾こうと思う。仲忠が七人の人の伝えた手を弾けば、涼は彌行の手を少しねたい位巧みに弾く。すると雲の上よりひびき、地の下よりとよみ、風雲動いて月星が騒ぐ。そして礫のような氷が降り、雷が鳴りひらめき、雪霰の如く降ったかと思うと消える。仲忠は七人の人の調べた大曲を余さず弾けば、涼は彌行の大曲の音の出る限り仕った。すると天人がくだって舞ったのである。つまり二人が負けず劣らず妙技をふるったので、天地が動いたり天人が降ったりしたのである。さてこそ二人に、同じ官位を授けられ、仲忠は皇女を賜ったが、涼にも皇女ではないが、高位の人の娘でしかも絶世の美女を賜わるという事になった。清少などには、高位の人の娘で絶世の美女よりも、皇女ということが、何にも替えがたい光栄を感じる。そこで皇女を得たことを挙げて仲忠びいきの氣を吐いたわけである。

宇津保の原文(イ)のところに「此の二つの琴の音せん所には、娑婆世界なりとも、必ずとぶらはむ」とあり、又仲忠の母が四、五百人の賊に襲われた時、なん風をかき鳴らすと山が崩れて賊どもが圧死したことを記してあって、涼・仲忠競演の時に天人が降ったのは、前記の伏線に応じたので、暗に仲忠の力であることの含まれていることは勿論であるが、ここは二人の神技によるようにかかれていますこと前述の通りである。

以上で私の解釈は終ったのであるが、結論としては(一)「いやし」は

「奇特」の意であること。(二)「何かは琴なども天人おろばかり弾きて、いとわろき人なり」は仲忠をさしていること。(三)「いとわろき人なり」
「帝の御むすめやはえたる」は共に逆語であること。の三に帰するのである。

更に前記注釈について一寸附記しておきたいことがある。

○武藤氏通釈に、空穂吹上上として、「こゝは神泉」云々とある吹上上は吹上下の誤、「こゝは神泉」云々の文句は、日本文学大系本その他に、「絵詞」又は「絵解」として載せてあるもので、永井氏の新釈は、武藤氏のを殆どそのまま採つてある。

○北条氏は、従来の註釈は一つとしてこれをアイロニーとして理解しなかったといわれているが、武藤氏は「わろき人なり」の方は、「特更に反対にいへるなり」と註されている。(「但し御娘やは」のやはも反語にあらずとしておられる。)岩崎美隆は、どちらをさすともなく、「仲忠がことをわざとあしくいへる詞おもしろし」といつている。「帝の御むすめやはえたる」については、旁註には、「たはぶれて也」と書いてあるので、すでに逆語に気づいている。なお北条氏は仲忠の弾いたのは「はし風」であつたとしておられるのは思い違いであらう。

○「ところを得て」は、「わが意をえて」「得意顔になつて」であるが、北条氏は、「ところを得て」となつてゐるのは「と」と「こ」は仮名の相似でいづれが原形とも断じ難いが「ところ」をとれば、アイロニーの意味が分かつての意とならう。といわれているのは全く同感である。

八三段についての私見は以上の通りであるが、このことは、八六段

「仲忠がおもてぶせなる事」と密接な関係があるので、これについて一言しなければならぬ。

まず八六段の「なかなるをとめ」について、諸註釈を見ると、抄・春曙抄・旁註は何れも、前記宇津保の「朝朗はのかに見れば飽かぬかな中なるをとめし留めなむ」の歌句であることに気づいていない。枉園抄美考に始めて朝朗の歌によっている事を指摘している。

武藤氏も「朝朗」の歌をひき、「其意は中宮が清少納言をしぼしめんとおぼしめしけんとおもひ奉るとなり」と書かれている。（通釈上巻二八五頁）

武藤氏後の諸註釈は皆「朝朗」の歌から出ていることを註しているのであるが、この文意については色々になっている。金子氏は「中なるをとめ」中宮様にも源涼の如く朝朗を飽かず面白しと思ひ給ひけん」と也。と記して、『空穂の諸本に「仲忠琴にあはせてひく」とある仲忠は涼の誤写なり。古註は出典に及ばず。新註は空穂の誤写に心付かで「中なるをとめ」を清少自身の事として全文を曲解したり。共に非なり。』（評釈四〇五頁）と書かれている。誤写であるということに確実な根拠があるであろうか。私の手許にある宇津保の諸本に、「涼」となっているのは一本もない。金子氏は御自身の解釈上都合が悪いので誤写であると断ぜられたのならば、それこそとんでもない曲解である。

栗原氏は、『うつば物語の大立物たる源涼と藤原仲忠とが陛下の御前に於て互に秘術をつくして琴を弾いた。涼が秘曲を奏すると、天人が天降って舞をする仲忠はそれを見て、「あさばらけはのかに見ればあかぬかな中なるをとめし留めなむ」と歌った。天人は今一さし舞って天

に上った。ここに「中なるをとめ」といったのは此の上の句の意味で、「中宮様にもあの朝ぼらけの風情をあかず美しいと思ひ召された事でございませう」の意に用ゐたのだ。』（全釈三七八頁）として歌は仲忠のものとし、あとは金子氏の訳を踏襲されている。

永井氏は、「中なるをとめ」といつて「しぼしめなむ」を思はせたのである。中宮にも少納言を中なるをとめの如くに御覧遊ばして、しぼし宮中にとめおきたく思召したでせうと思ひましたという意。（新釈一八四頁）とあり、武藤氏と同じ解である。

日本文学大系本には、「朝ぼらけ」の歌をひき、「涼が琴を弾きしに天人降り舞ひし時の歌なり」とある。（五二六頁）

日本古典全書本（田中重太郎氏）（一四九頁）には「宮様にも、「朝ぼらけはのかに見れば飽かぬかな中なるをとめし留めなむ」（宇津保物語吹上の下、涼の琴の音に下った天人の歌）の御心で御覧になったことと拝察申しましたが。」

日本古典文学大系本（枕草子一二六頁）

宮さまにも「なかなるをとめ」と涼がほめたように、朝ぼらけを面白く御覧になりましたでしようにと、思った次第でございます。（これは金子氏の踏襲してある。）

次に「仲忠がおもてぶせ」についての註を見ることにする。

抄は本文が「たがおもてぶせなる事を」となっているので、全然解はちがってくる。

枉園抄の春曙抄のところには、「彼うたひ物などにあることばにや」美考『仲忠すずしに仰せて、ことをひかせ給ふに、二人の人たち、手を

つくしてひくに、月星さわぎ氷ふり、雷ひらめき、雪ふりなどして、仙人くだりてまふ。此時、仲忠さんにあはせて、「あさばらけほのかに見ればあかぬ哉かなるをとめしばしとめなん」といふ歌をひくよしありて、さて仙人は、いまひとかへりまひて、のぼりぬるよし記せり。かかれば仲忠がおもてぶせといふべき由はなきやうなれば、こは仲忠が仙人をとどめかねて、かななるをとめしばしとめなんと、仙人のとどまらぬを、あかずおもへることを、仲忠がおもてぶせといひなし給ふなるべし。』（二五八頁）

武藤氏

少納言が「中なるをとめ」といふ歌を引きしをいふ。此歌は仲忠の面目ある事なれど、わざと反対にいへるなり。（通釈上巻二八六頁）

永井氏（新釈一八五頁）

「中なるをとめ」の歌は仲忠の面目ある事であるが、ここには少納言が、中宮を仲忠に、少納言自身を中なるをとめに比して、中宮が引止めたく思召したでせうと思ひましたと、いかにも中宮が少納言を引止めなかつたやうにも聞えるので、仲忠に比せられた中宮にとつては不面目な申出であるから、わざとかく反対にいつたのである。

金子氏（評釈四〇五頁）

仲忠の競争者たる涼が、琴を弾きて、天人が下りて舞ふ如き奇特を現したる時の「中なるをとめ」の歌を、何故に啓したるぞ。この歌を啓するは、仲忠の面伏即ち恥辱に当るなりと、中宮の清少を責め給へる也。

栗原氏（全釈三七九頁）

仲忠の競争者たる地位にある涼が秘曲に伴う奇瑞を現したのは、仲忠に

取つて決して名譽のことではないからである。

田中氏日本古典全書本（一四九頁）

涼の功の歌をひいたりなどして、そなたがとてもひいきにしてゐるといふ仲忠の不面目になることをどうして申したのか。

日本古典文学大系本（一二六頁）

あなたは仲忠がひいきだそうなのに、涼の歌など挙げて仲忠のために不面目でしようという意。

以上で分かるように、金子氏が宇津保物語の「朝朗」の歌の仲忠を「涼」の誤写とせられてから、その説を採る註釈が多くなっている。それにしても、仲忠のおもてぶせの解釈が非常に曖昧である。ただ武藤氏のわざと反対にいつたのだという説は、一見奇異に見えているが、非常に示唆に富んでいる。永井氏もこれを採られているようだが、解釈の上に今一步という感がある。前述した通り、中宮と清少は共にユーモアに富み、肝胆相照らすところがあるので、前に、仲忠は天人が天降つただけのつまらぬ人だとか、皇女を得なかつたではないかといったのと同様、中宮もこれに呼応して鸚鵡返しの、仲忠のおもてぶせなことをなせいかと、アイロニカルにいわれたのに相違ないと思う。こう見てくると、中宮が、仲忠びいきであることも、清少が仲忠の童生いを悪くいう人はいくといつたことも一貫して、中宮の心の中と清少のいつていることに何ら蹉跌を来たさないことになる。又かななるをとめとお思ひになつたでしようといういい方も、やはりユーモラスなじょうだんであることも解せられるわけである。（引用文中の漢字の字体は、大部分現行の字体になつてゐることを付記しておく。）（昭和三十五年一月十三日記）